



文部科学省 IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



佐々木優太氏(宮城県仙台二華中学校・高等学校)

公立の中学校2校に勤務した後、人事交流の一貫で、仙台二華中学校へ赴任。
高校の担当になってからは3年目。IB教育歴は2年。TOK、CASコーディネーター、英語教員。

「教員は学びの伴走者。重要なのは、学び方の利点とリスクを正しく理解し、生徒自身がそれらに納得してIBを選択しているかということ」

あえて教員が一旦議論の外に出て見守ることで、
生徒が自主的に考え、意見を出し合い本質を見出す
ようになった

私は、IBの科目担当になるまではIBについての知識がほとんどありませんでした。そんな私が仙台二華中学校から仙台二華高校へと異動することになり、IBに関わることになりました。高校に赴任して一年目(2020年度)は本校でDPを導入する準備期間でしたので、人生初の高校教員としての仕事を覚えるだけでなく、IBに関する知識を身に付ける時間でもありました。また、2020年度の初めは新型コロナウイルスの影響で休校だったこともあり、ガイドを読み進めたり、じっくり時間を取ってIBへの理解を深めたりすることができました。初めはCASコーディネーターを務めることから始めました(編注: CASとは日本語で「創造性・活動・奉仕」の頭文字で、IB Diplomaを取得する上で全生徒が修了しなくてはならない課外活動)。そこで机上の学習に留まらず、生徒が学校外で活動を広げていく姿を目の当たりにしました。ある生徒が地域の子ども食堂を見つけ、何気なく参加し始めたのですが、活動を継続していくうちにどんどん責任ある仕事を任せられるようになりました。IBのハードなプログラムに取り組んでいるにも関わらず、一度も休まずに参加し続けたことに感心しましたし、その生徒が地域の方と協働して活動を進め、責任をもってやり遂げようとする姿勢に賞賛の拍手を贈りたいと思いました。他の生徒も様々な活動に取り組む様子が見られ、生徒のおかげでCASの重要性や楽しさを実感することができました。

そして、本校でDPをスタートした最初の一年は、CASに加えてTOKについて理解を深める年となりました。

公式のIB教員ワークショップも受けましたし、外部の講習や勉強会にも積極的に参加するようになりました(編注: TOKとは日本語で「知の理論」という名前のIB独自の教科。「知識」という概念自体がどのような性質を持つものなのかということを経験的な角度から二年間かけて分析する学び)。TOKの科目担当になって一年が経ち、今では多少慣れてきましたが、最初は生徒たちとうまく噛み合わず、もどかしい思いをしました。TOKの授業では、教師である私がなんとかしようと議論に入っていけばいくほど、生徒たちは「私たちが気になっているのはそのポイントじゃない!」といった感じになり、授業の雰囲気がとても重苦しくなりました。CASは公式ワークショップを受けたことで、ある程度イメージが湧いていたのですが、TOKはそうはいきませんでした。他県のIB校で勤務する先生に助言をいただき、ある時から議論を生徒に任せて見守る姿勢に変えてみました。すると、思いもよらない議論が繰り広げられ、とても驚いたことを覚えています。教員が一旦議論の外に出て、あえて見守るスタンスをとることで、生徒たちが自主的に考え、疑問点や意見を出し合って本質に迫っていく。クラスの中でそんな姿がみられるようになっていきました。もちろん、議論の方向がずれたときや、一つの意見に流されすぎた時などは一声かけるようにしていますが、生徒同士で事例を出し合い、エビデンス(根拠)を見つけながら、生徒のペースで議論していくことが大切なのだと痛感しました。

表現するとしたらIBは「学び方の選択」 生徒の主体性重視と学習者本人の学ぶことへの責任が大きい

IBのカリキュラムを学ぶのに向き不向きというものがある

るかどうかは分かりませんが、慣れるまである程度の困難はあると思います。TOKに関して言うと、ある課題があって答えが1つに定まるというものではないですし、批判的な雰囲気になることも多いので、中には苦しんでいる生徒もいるかもしれません。本校では、生徒が先生に相談したり意見を出したりできる場として、「振り返り」という時間を設けています。学習者目線からの要望を先生に直接出したり、やってみたいことを自ら発信したり、先生と生徒が授業と一緒に作り上げていくという意味で、有効な時間となっています。生徒は教員が思っているよりも色々な角度から物事をよくみていて、そういう意見を聞くことは大変参考になります。生徒と教員がつながる他に、生徒同士が年次を超えてつながることもできないかと考えています。プレIBと銘打って高校一年次生の希望者が約一年かけてIBの準備をしていくプログラムがあるのですが、その中で先輩IB生たちと交流できる場を設けるようにしています。今はまだ模索中ですが、メンターのような存在の先輩を作ってほしいと願っています。

IBに向いている向いていないというのは、スキルや性格、そしてその他の要素も複合的にからむため断定するのは難しいです。しかし、あえて表現するとしたらIBは「学び方の選択」と言えます。IBでは生徒の主体性を重んじています。その点では学習者本人の学ぶことへの責任が大きいと言えるでしょう。私もIBに携わるまでは、教員は牽引していく立場という意識がありましたが、今は一緒にゴールに向かっていく伴走者のような意識に変わりました。そして重要なのは、そのような学び方の利点とリスクを正しく理解し、生徒自身がそれらに納得してIBを選択しているかという点にあります。自分で納得感を得られていれば、IBプログラムのハードな面にも向き合えると思います。この納得感が生徒の成長を促す原動力だと私は信じています。

様々な認識を考慮した上で結論を出す考え方を身に付け
平和的な問題解決に貢献できる人材を送り出すことが
できる

高校三年次の生徒に「TOKどうだった？」という質問を投げかけた時に、みんなが口を揃えて「批判的な考え方ができるようになった。」と答えてくれました。ニュースなどを見ても、「他の見方はないのか」「本当にそれだけが全てなのか」と考えられるようになったそうです。それは明らかにTOKのおかげだと生徒自身が感じていまし

た。以前プレIBの授業で「批判的な思考を身に付け、様々な意見を理解できるようになった」として、それが実社会でどのように生かせるのですか？」という質問が高校一年次生から出ました。それを高校三年次生にぶつけてみると、「見方が広がって、他の意見に共感できるというだけで大きな価値がある。」「文脈や背景を踏まえて、今回はどの意見を大事にするべきかが決められる。」「A、B、C、Dの4つの意見があるのは認識していますが、今回は〇〇という理由でCという提示の仕方の方がコンセンサスを得やすい。」などの返答がきました。このような考え方が身に付いていれば、社会の様々な場面で平和的な解決に貢献できる人材を社会に送り出すことができると感じました。近い将来、IBで学んだことが実際にどのように生かされたのかを生徒たちから聞くことを今から楽しみにしています。

IBは生徒と協働して授業をつくっていくチャレンジングなプログラム

私自身まだIBに関わって二年目ですので、アドバイスというとおこがましいですが、IBは「英語を使って意見交換をするプログラム」では全くないということがわかりました。まさに全人格教育です。ディスカッションも、なんとなく楽しく盛り上がるだけというものではありません。エビデンスがないと議論ができませんし、事前に自分でリサーチして、思考して授業に臨む必要があります。IBは教師と生徒が協働して授業をつくっていくチャレンジングなプログラムでもあります。クラスでの学びが上手いといった時の爽快感は非常に大きいです。そういう体験をIBに関心のある先生方と共有していけたらと思っています。

